アメリカ的信条の形成

―― アメリカニズムの歴史的考察 ――

有　賀　　貞

はしがき

1. 独立革命

(1)植民地社会におけるイギリス的伝統――(2)トマス・ペインにおけるパラドックス――(3)アンチテーゼとしてのアメリカ――(4)独立革命の思想史的意義

2. ジャクソニアン・デモクラシー

(1)選挙権の拡大と民衆信仰の勝利――(2)セルフメイド・マン崇拝の確立――(3)ジャクソニアン・デモクラシーの意義――(4)南部の問題

まとめ

アメリカが非常な多様さをもつ国，急速な変化の国であると指摘することは常識となっている。しかし，この国には強固な統一がある。民族的背景，階級，地方，信仰，皮膚の色を異にするすべてのアメリカ人が共有する何かがある。それは一箇の社会的エトス，政治的信条である。この「アメリカ的信条」こそ複雑な構成をもつこの大きな国の接合剤なのである。

ガンナー・ミルダル『アメリカのディレンマ』(1944年)

はしがき

ミルダル（Gunner Myrdal）が「アメリカ的信条」とよんだ一組の信条――それは「アメリカ的生活様式」あるいは「アメリカニズム」ともよばれる――はアメリカ人を一つの国民として統合してきた強力な接合剤である[1]。「アメリカ的信条」とは何か。それは簡単にいうならば，個人の尊厳，人間の平等という原理についての信念であり，そしてアメリカがそれらの原理を実現するために建国された国，すなわち「自由の国」「平等の国」であるという信念である[2]。もちろん，個人の自由，人間の平等という原

理は決してアメリカに個有のものではない。それはふつう近代市民社会の原理といわれ，ブルジョワ・デモクラシーの原理とよばれるものである。しかし，それらの原理がアメリカにおけるほど強烈に主張され，国民的原理としてナショナリズムと不可分に結びつけられた国は他にない。「自由」と「平等」，そして「競争」「成功」「機会」といった諸観念がアメリカほど強調されてきた国はないであろう。それらの言葉はアメリカの国民的価値観を表現する言葉である。「アメリカ的信条」はアメリカ文化のエトスであり，またある宗教社会学者がいうように，ある意味では「アメリカの宗教」であるとさえいえるのである[3]。それゆえ，アメリカ文化を論じようとする者は，何よりもまず，この「アメリカ的信条」あるいは「アメリカニズム」を問題としなければならない。アメリカにおいて，自由主義，平等主義がどのように発展し，アメリカ的信条として確立するに至ったかを，独立革命とジャクソニアン・デモクラシーの時代とに焦点をおいて，歴史的に考察することが本稿の目的である[4]。

1. 独 立 革 命

(1) 植民地社会におけるイギリス的伝統

アメリカニズムについて歴史的に考察しようとする場合，まず考えに入れておかなければならないのは，植民地時代には，アメリカ人すなわち植民地人がイギリス人であるという意識をもっていたことであろう。かれらはそれぞれの植民地の住民であるという意識をもち，自己の植民地についての強い郷土愛をもっていたが，「アメリカ人」であるという意識は極めて弱かった。かれらの共通の所属意識はイギリス帝国の構成者であることであり，それが，かれらの最も誇りとするところであった。フランクリン(Benjamin Franklin) は後年1765年当時を回顧して，「私は本国からの分離を望んだり，分離するほうが有利だとほのめかしたりする者に一人として出逢ったことがなかった」[5] と述べているのは真実であろう。

17世紀以来，植民地人は植民地の内政に関しては大巾な自治権を行使し

ており，本国住民と同じイギリス憲法に保障された臣民の権利と自由とを享有していると信じていた。マサチュセッツの法律家で植民地の権利に関する理論家であったジェイムズ・オウティス（James Otis）は「イギリス憲政は地上存在するものの中で最も自由な断然他よりすぐれた統治形態である」[2] と述べていたが，これは植民地の指導層に共通した意見であったと思われる。

植民地に対する本国の統制は主として植民地の経済に関するものであった。植民地の貿易や産業統制は18世紀にはいって次第に組織的におこなわれてきたが，その中には，海運に関する政策のように，植民地にとって有利なものもあった。また植民地にとって不利な政策は長年にわたるいわゆる「有益な怠慢」によって厳しく実行されなかった。植民地はイギリス帝国体制の枠の中で，経済的に発展してきたので，かれらはむしろそれを恩恵的なものとさえ感じ本国政府による植民地の貿易産業統制を打破しなければならない必要を感じなかった。1774年10月の第1回大陸会議の決議が，「われわれはそれが母国に対し全帝国の通商利益を確保する目的をもち，また帝国のそれぞれの構成分子の通商利益を得んとする目的のため，われわれの外国通商の規制に善意をもって留まるかぎり，喜んで同意する」[3] と述べ，本国政府がイギリス帝国全体のために植民地の通商規制をおこなうことを認めていたことは，それを物語っている。

植民地人はイギリス帝国の中にいることに政治的にも経済的にも不満をもたず，むしろそのことを喜びそれを誇りとしていた。かれらがイギリス帝国の臣民であるという意識をもち，自己をイギリス帝国に合一化していたことは，一面では，かれらがイギリス的な価値観を受けいれていたことを意味する。植民地人は自由なイギリス人として，個人の自由と権利の尊重，立憲政治，議会政治の原則を受けいれるとともに，またイギリス人の伝統たる世襲的価値への敬意や身分的階層社会の観念を受けいれていた。かれらは本国の国王を頂点とする貴族の身分制度を認め，また本国のイギリス人と同じく「ジェントルマン」と「コモン・ピープル」とを区別し，

公共の事柄に関しては前者の指導にゆだねることを当然と考えていた[5]。つまり，自己をイギリス帝国と合一化しているかぎり，植民地人はアメリカ的価値あるいはアメリカ的原理を本国のそれに対するアンチテーゼとして掲げる必要はなかったのである。

もちろん，植民地がイギリス的な価値観を受けいれていたということは，植民地社会の構造が本国のそれと同じであったことを意味するものではない。北アメリカにイギリス領植民地が建設されたのは17世紀になってからであったから，そこには封建制度は最初から強い根を下すことはなかった。領主制は封建制度であったが，領主権は住民の圧力と本国政府の圧力とに狭まれて，きわめて弱いものとなった。カロライナ植民地の建設者が描いたような整然と階層化された封建社会の移植は実現しなかった。独立革命の時まで残っていた封建遺制は，領主植民地における領主制と，王領・領主植民地における国王あるいは領主の未処分地処分権と免役地代徴集権だけであった。植民地に移植された封建制度は形ばかりのものであったから，ルイス・ハーツ（Louis Hartz）のように，アメリカには封建時代がなかったということは正しいであろう[5]。

封建的要素が存在したとはいえ，植民地社会の構造はかなり開放的であった。広大な土地が存在したので，土地保有者となることは比較的容易であり，多くの者が自由土地保有者（フリーホールダー）となることができた。とくにニューイングランドやペンシルヴァニアなどの植民地では，その数が多く，クレヴクール（Crevecoeur）らがアメリカの特色として強調した「相応な資産の快い均一性」の普及がみられた[6]。たとえば，革命前のペンシルヴァニアのチェスター郡では成年男子の56パーセントが，ランカスター郡では60パーセントが，自由土地保有者であった[7]。そしてチェスター郡の場合，自由土地保有者の約60パーセントが50エーカーないし200エーカーの保有者であった[8]。コネティカットのあるタウン（イースト・ギルフォード）では，1740年に成年男子110のうち102人が自由土地保有者であった[9]。植民地では，自営農民として自立することが比較的容易であったと同時に，発展す

る都市で貿易商人として，製造業者あるいは職人として，あるいは弁護士などの自由業者として成功する多くの機会があった。植民地社会は本国に比べて流動性に富み，立身の機会に富んでいたことはたしかであろう。フランクリンの生涯はそれ自身このことを実証するものであったが，かれの『貧しいリチャードの暦』はユーモアを交えて勤勉節約による成功への道を説く警句をのせることによって，勃興しつつある人々の共感をよんだ。『貧しいリチャードの暦』の意義は，世襲的な価値に対して，個人の努力による成功の価値を強調し，のちにアメリカニズムの柱となる価値観を前面に押しだしたことにある[10]。

植民地では，本国に比べて，財産所有が広く民衆にゆきわたっていたように，政治に参与する権利も広くゆきわたっていた。選挙資格の規定は植民地によって異っていたが，各植民地とも一定の広さ以上（ペンシルヴァニア，サウス・カロライナ，メアリランドなどでは50エーカー）あるいは一定の価値以上（マサチュセッツ，ロード・アイランドでは年収40シリング，ニューヨークでは評価額40ポンド）の土地をもつ自由土地保有者（ニューヨークでは無期限借地権保有者も同等に扱われた）に選挙権を認め，また多くの植民地がそれと同等の土地以外の財産をもつ者に対しても選挙権を与えていた。植民地では本国に比べて自由土地保有者の比率が大きかったから，選挙権もそれだけ広く民衆にゆきわたった。ウイリアムソンの推定によれば，ニューヨークでは成年男子人口の2分の1以上，ヴァージニアでは3分の1から2分の1，マサチューセッツではタウンにより2分の1から100パーセント近く，ペンシルヴァニアでは約2分の1が有権者であった[11]。

しかし，選挙権そのものが広くゆきわたっていたとはいえ，植民地において実際に政治の実権を握っていたのは，相当の資産と教養とをもつ上層階級であり，とくに貴族（アリストクラシー）とよばれた少数の家族であった。どの植民地にも，国王あるいは領主の土地付与によって，土地投機によって，商業的農業によってあるいは貿易によって，大きな富を蓄積した家族が現われた。かれ

らは財産とともに社会的威信を得，植民地の重要な公職につき，そして婚姻によって相互に結びついた[12]。かれらの周辺には，かれらほどの財産と威信とはもたないにせよ，一応の資産と高い教養とをもつ「ジェントルマン」がいた。これらの植民地上層階級は，イギリスの貴族ないしは上層ブルジョワジーの生活をとり入れることに努め，また本国の貴族と同じく貴族としての義務観念をもっていた。また植民地の他の人々も，かれらの社会的指導を受けいれていた[13]。どの植民地でも，総督を補佐する機関である参議会（カウンシル）はほとんど「貴族」あるいは「一流家族」とよばれた家族によって占められ，住民の選挙によって選出される民議会もほとんど上層階級によって占められていた[14]。上層階級の指導と一般民衆の服従というイギリス流の社会観念は，植民地においても機能していたのである。「貴族」あるいは「一流家族」とよばれたものの数はごく限られていたが，上層階級一般は決して閉された階級ではなかった。植民地社会の流動性と財産配分の相対的均等性とは世襲的価値意識を弱め，身分的階級社会の観念を現実的に弱める力として作用しつつあったことはたしかであろうが，革命に至るまで，植民地時代のアメリカにはイギリス流の価値観が強い力をもっていたのである。

(2) トマス・ペインにおけるパラドックス

1760年代になって，植民地と本国との間に紛争が生じたとき，植民地の反対運動を率いて立上ったのは，上層階級に属する指導者であった。王党派の指導者もまたこの階級から出たけれども，革命側の指導権もかれらの手中にあった。本国の政策に対する反対運動ははじめは植民地指導層のほとんど一致したリーダーシップの下に展開されたのであり，革命派と王党派という対立に向う分裂が明瞭にあらわれるのは1774年になってからである。植民地の上層階級の指導者たちは，イギリス憲法に保障されている臣民の権利を根拠として，本国政府の新しい植民地政策に反対した。1765年の印紙税法反対決議から1775年の武力による行動の必要の声明にいたるまで，個々の植民地議会や大陸会議の決議，宣言，あるいは請願は，すべて，

植民地人の国王への忠誠を表明しつつ，イギリス憲法によって植民地の権利を主張し，本国の新政策を撤回することを求めるものであった。伝統の擁護者，既得権の擁護者という立場をとったのは，植民地側であった。反英運動の急先鋒といわれた指導者ジョン・アダムズ（John Adams）でさえ，1775年になっても，「この植民地（プロヴィンス）の愛国者（パトリアト）たち（植民地の権利の擁護者たち）は何も新しいことを望んでいるのではない。かれらはただ，かれらの昔からの権利を保持したいと願っているだけである」と述べていたのである[15]。植民地の既得権を守るために本国の政策に抵抗した指導者たちは，当然ながら，植民地内部の秩序や制度を変革することには関心がなかった。かれらはすでに植民地における権力者であったから，独立を決意してからも，アメリカ内部の秩序や制度はできるかぎりそのままにしておこうとしたのである。アメリカ独立革命がしばしば「保守的な革命」[16]といわれるのはそのためである。

トマス・ペイン（Thomas Paine）といえば，『コモン・センス』の筆者として名高い。かれをアメリカ独立革命のイデオローグとみなすことは正しいが，そこには一つのパラドックスが含まれているのである。ペインは1776年1月『コモン・センス』を発表して，君主政は本質的に自由と両立しない暴政であると論じ，アメリカは共和国としてイギリスから独立すべきであると述べ，また独立によって得られる利益は実に大きいと主張した。平明な論理と扇動的な文章とによって，アメリカに独立をよびかけたこの小冊子はアメリカ人の間に大きな反響をよび起し，3カ月間に12万部を売ったといわれている[17]。『コモン・センス』はアメリカ人の間に独立のために立上る気運を盛上げるうえで最も強力な扇動文書となった。しかしペインがこれを1776年ではなく，その数年前に発表していたとしたら，当時，植民地の人々からこれほど爆発的な共感をよび起さなかったであろう。国王が植民地の反抗に対して強圧政策をとり，植民地側も武器をとって立ち，和解の可能性が失われてきた時であったからこそ，植民地人は君主政は暴政であるというペインの主張に共鳴することができたのである。『コモン・

センス』の表紙には「アメリカの住民への呼びかけ」とあり，そして「一イギリス人著」と書かれている[18]。ペインはアメリカ生れではなく，1774年の末にイギリスからフィラデルフィアに渡ってきた文筆家であった。君主政を激しく攻撃し，イギリスからの独立を大胆によびかけた文書がアメリカ土着の指導者によって書かれず，本国から来たばかりの人物によって書かれたことは，たんなる偶然ではなかった。前述のように，植民地の指導層はこれまでイギリス帝国体制の中で恵まれた地位を享有してきたから，それを従来どおりの形で維持していくことに最大の利益を感じていた。かれらには君主政に対する敵意もなければ，あえて独立する意志もなかった。植民地の一般民衆もイギリス本国の権力を従来身近に感じなかったから，君主政や本国との結びつきに対する反感をもたなかった。一方，ペインはイギリスの貧乏な職人の子に生まれ，下級官吏の地位を不正や俸給値上げ運動のために失い，無一文の哀れな境遇に陥り，職を求めて新大陸に渡ってきた人物であった[19]。本国の階級的社会の中で下積み階級の挫折感を強く感じていた人物こそ，君主政を激しく非難し，君主政との絶縁を主張することができた。ペインのような人物こそ，君主政，不平等な階級社会としてイギリスに対して，そのアンチテーゼとして，共和政，平等な市民社会としてのアメリカを想定することができたのである。アメリカをイギリスないしはヨーロッパのアンチテーゼとして対置することは，のちにアメリカ・ナショナリズムの伝統的発想形式となったが，このアンチテーゼを提示した最初の人物がアメリカ土着の指導者ではなく，「一イギリス人」であったところに，アメリカ独立革命の一つのパラドックスがあるのである。

(3) アンチテーゼとしてのアメリカ

とにかく，ペインはアメリカ・ナショナリズムの最初のイデオローグであった。アメリカ独立宣言は個人の尊厳と人間の平等とを宣言し，各州憲法と合衆国憲法とは君主政，貴族身分，封建制度との絶縁を表明し，人民を主権者の地位に据えた。独立国家の国民となったアメリカ人は，新しい国のすぐれた独自性を強調して国民的な誇りを満足させるために，ペイン

が示したイギリス（あるいはヨーロッパ）対アメリカというアンチテーゼを熱烈に繰り返すことになったのである。ジェファソンは君主政に対する強い敵意を表明し，「ヨーロッパの大多数の民衆は肉体的道徳的抑圧に苦しんでおり，かれらの生活はアメリカの民衆が享受している幸福な生活とは比べものにならない」[20] と論じ，アメリカの若者に対して，イギリスやヨーロッパ大陸に遊学することは無益であり，貴族主義の悪弊に染って堕落するばかりだと警告した[21]。フランクリンは『アメリカへ移住しようとする人々への情報』の中で，ヨーロッパとアメリカとにおける価値の転倒を明快に述べた。

ヨーロッパでは名門は尊重されるが，この代物（しろもの）を運んだところで，アメリカほど不利な市場はどこにもない。アメリカでは他人のことをきく場合，人々はあの人の身分は何かとはきかないで，あの人には何ができるかときく。もし有用な技能をもっておれば歓迎されるし，それを実施してうまいことがわかれば，知り合いのすべてから尊敬される。……アメリカ人のこういう考え方からすれば，祖先が地主，すなわち値打ちのあることは何ひとつせず，無為に他人の労働に寄食する人間――単なるごくつぶし――であったことが判った場合よりも，祖先なり親類なりが10世代もの間，農夫，鍛冶屋，大工，ろくろ工，織工，皮なめし工，ないしは靴工でさえあったこと，つまり社会に役立つ人間であったことが判った場合の方が系譜研究家によけい感謝するであろうと思う[22]。

この言葉は1784年当時のアメリカ人の価値観の説明としては若干の誇張が含れていたであろう。しかしそれはアメリカ人の価値観の傾向を適確に表現していた。貧乏な職人から身を興してアメリカを代表する人物となったフランクリン，すでに『貧しいリチャードの暦』で個人の努力による業績の価値を強調していたフランクリンは，アメリカ人の価値観の傾向をこれほどはっきりと言うことができたのである。

しかし建国当時のアメリカの指導層は大部分上層階級の出身であり，父

祖の遺産を継承していた。かれらは世襲的価値に対する敬意をすぐに完全に棄てることができず，また「紳士」と「一般民衆」とを区別する階級観念と絶縁することはできなかったであろう。けれども，かれらもまた，国民的統合の契機をアメリカの独自性に求めて，アメリカとヨーロッパというアンチテーゼを強調しなければならなくなった。かれらはヨーロッパの君主政や貴族制を否定すればするほど，それだけ民主主義に接近していかざるをえなくなった。しかも，革命は民衆を行動に動員することによって，かれらの政治意識を刺激し，民主主義的気分を育成した。革命の指導者たちは選挙資格についてはできるだけ従来のままにしておこうとし，多くの州でそれに成功したが，いくつかの州ではそれを緩和しなければならなかった。ペンシルヴァニアなどでは財産資格による選挙権制限は撤廃され，成年男子の納税者には選挙権が与えられた[23]。

1787年に合衆国憲法会議に出席した政治指導者の多くは「民主主義のゆきすぎ」や「平等化精神の高まり」を不安に感じていた。かれらの中にはイギリスの政治形態を安定した政府の模範と考える者もあった。しかしジェイムズ・ウイルソンが「イギリスの政府はわれわれの模範にはならない。われわれは同じような政府を作るための素材を何ももっていないのだ」[24]。と述べたように，一旦，君主政と貴族制とから絶縁し，人民主権の原理を掲げて革命を戦ったからには，もはや民主主義的傾向を押しもどすことは難しかった。保守的な政治指導者にとって可能だったのは，抑制均衡のメカニズムと間接選挙の多用によって，一般民衆の政治権力への接近を抑制するような連邦政府機構を作ることだけであった。

(4) 独立革命の思想的意義

革命戦争の間，革命派の指導者が人民主権の原理をかかげ，民衆の協力を求めて，民主主義を促進していったとき，王党派の有力者は，革命鎮圧後，アメリカの制度をイギリスの制度に一層近づけなければならないと感じていた。王党派の有力者は本国との結びつきに最も深い利害をもつ人々であり，アメリカの上層階級の中でも，世襲的価値，階級社会の観念に最も

強い執着を抱いている分子であった。たとえばニュー・ジャージーの有力な王党派デイヴィッド・オグデン（David Ogden）はニューヨーク市に逃れ，避難者委員会のメンバーとなったが，かれは反乱平定後のアメリカの再建について次のような案を立てていた。それは，本国議会に従属するものとしてアメリカの植民地全体の議会を作り，本国議会にならって，それを国王代理，任命制の貴族院，それに各植民地議会から選出される庶民院の3者で構成するというものであった。またペンシルヴァニアの有力な王党派の指導者ジョセフ・ギャロウエイ（Joseph Galloway）は植民地の反乱収束後，全植民地を王領植民地とし，それぞれがイギリスにならった政治制度を設けることを主張し，アメリカ植民地全体の政治機構については，オグデンと大体同じ案を考えていた。かれらはいずれもアメリカに何らかの貴族身分を設けることを主張したのである[25]。独立革命の成功とともに王党派の多くは本国，カナダあるいは西インドに移住した。その数は6万人以上と推定されている。独立革命の成功とともに，王党派の多くが――とくにその最も活動的な部分が――アメリカから去ったことは，アメリカにおける貴族主義的伝統を衰退させ，したがってアメリカ・デモクラシーの発展を早めることを助けたといえよう。王党派財産の没収とその配分とが土地制度の変革に実際には大した影響を与えなかったことは知られている[26]。それゆえ王党派について書いたネルソン（W. H. Nelson）が「王党派の抑圧と追放とがアメリカに何らかの重大な影響を残したとすれば…それは思想的（フィロソフィルカ）なものであろう」[27]と述べているのは妥当であろう。独立革命は民主主義的傾向と貴族主義的傾向との対立を顕在化したのであり，革命の帰結には，どちらの傾向が支配的となるかが懸けられていたというパーマー（R. R. Palmer）の見解は適切である[28]。

アメリカ独立革命の史学史において，カール・ベッカー（Carl Becker）以来，革命の二重性――イギリスからの独立という面（外部革命）とアメリカ内部における民主化という面（内部革命）――が認められてきたことは周知の通りである[29]。一時，多くの歴史家が主張したような，急激な権

力の移動は，独立革命の際，ほとんど見られなかったというのが真実であろう。大商人・地主・プランター層から小農民・都市小市民層への権力の移動という意味での「内部革命」はほとんど存在しなったと思う[30]。しかし独立革命がアメカ内部の民主化を促進したことを，私は否定するものではない。アメリカはイギリスからの分離独立とともに，君主政，貴族制，封建制と決定的に訣別し，個人の尊厳，人間の平等，人民主権という原理を宣言した独立したアメリカ人はかれら自身のナショナリズムをもつ必要に迫られ，アメリカが自由で平等な市民の共和国であるという独自性を強調した。アメリカ人は独立革命の諸原理を強調すればするほど，民主主義ないしは平等主義に接近しなければならなくなった。そして革命の原理は，革命に参命した民衆の政治意識を刺激し，かれらの民主主義的要求を強めたのである。個人の権利・自由の尊厳という観念は，革命前からアメリカに確立していた。しかし人間の平等，人民主権という観念はそうではなかった。独立革命はアメリカの自由主義を貴族主義と結びついたイギリス的な自由主義から民主主義・平等主義と結びついたアメリカ的自由主義へと転換させる契機となった。そして民主化された自由主義はナショナリズムに結びついて，次第に強固なイデオロギーとなっていくのである。これが，アメリカ独立革命のアメリカ思想史における意義であろう。

2. ジャクソニアン・デモクラシー

(1) 選挙権の拡大と民衆信仰の勝利

前述のように独立革命は民衆の間に民主主義精神を強めたが19世紀に入ると選挙権の一層の拡大を求める声が高まり，選挙権の拡大は抑えがたい傾向となった。1787年の合衆国憲法会議では，選挙権を自由土地保有者に限るのが望ましいという意見が強かったが，その時にも，フランクリンのように民衆は選挙権を与えられた方が愛国心を強めるという意見があり，またチャールズ・ピンクネー（Charles Pinckney）のように，アメリカの

民衆は他国のそれと異なり，平等と自由とに恵まれているから，外国におけるように，無産者の平等化精神を恐れる必要はないという意見も出された[1]。19世紀に入ると，上層階級の指導者の多くは，次第にこのような意見を受けいれ，むしろ進んで選挙権の拡大を容認し，財産資格を撤廃し，普通選挙権へと近づけていった。かれらはそうすることによって，かれら自身の指導権を維持していくことができると考えたのである。多くの州で選挙権拡大の運動は，しばしば上層階級の政治家によって指導されたのである。かれらは，アメリカはヨーロッパと違うこと，階級闘争はアメリカでは起らないこと，すべての者が私有財産制の維持に共通の利益をもっていることを主張した[5]。

19世紀のはじめに東部諸州では次々に選挙制度の改革が実現した。ニュー・ジャージー州では1807年，コネティカット州では1818年に，すべての成年男子納税者に選挙権を与えた。これはほとんど普通選挙権に近いものであった。マサチュセッツでは1820年に財産資格を廃止し，ニュー・ヨークでは1821年に財産資格を廃止し，さらに同州は1826年に納税者資格を廃止して，男子普通選挙権を採用した。南部では，メアリランド州が1802年に，サウス・カロライナ州が1810年に白人男子普通選挙権を採用し，ヴァージニアでは1830年に選挙権は納税する借地農および戸主に拡張された。1840年代に至るまで財産資格を廃止しなかったのはノース・カロライナとドアの暴動を起したロード・アイランドの2州だけであった[6]。

西部に新しく組織された諸州では，財産資格を設けた州はなく，選挙権を成年男子納税者に限った州がオハイオ，ルイジアナ，ケンタッキーなど，いくつかあっただけであった[4]。革命後，フロンティアの前進は植民地時代のそれとは比較にならない早さで進んだ。東部の海岸地方には多くの名門旧家があり，「貴族」による支配の伝統が残っていたが，東部諸州の内部でも州内の西部人口がふえるにつれて，名門旧家の指導者の影響力は弱まった。さらに，西部に作られた新しい州は，多分にフロンティア的な社会であって，そこには，名門旧家は存在しなかった。西部諸州の有力者は

大ていフロンティア社会における成功者であり，洗練された風格や教養に欠けていた。西部の発展が，アメリカの貴族的支配の伝統の衰退を促進した大きな要素であったといえるであろう。アメリカにおける「生まれがよく，教養と学識ある者による指導」の衰退を決定的にしたものは，ジャクソニアン・デモクラシーであるが，この運動の象徴的指導者ジャクソンが西部の新しい州の出身であったことは偶然ではない。

アメリカの民主主義の発展に対する西部の貢献を強調したのは，かのフロンティア学説の始祖フレデリック・ジャクソン・ターナーであった。ターナーは西部のフロンティア社会が最も自由で平等的な社会であったこと，それゆえ，フロンティアの存在がアメリカ民主主義を育成した最大の要因であることを強調した[5]。ターナーの見解をめぐって多くの批判や反批判が加えられてきた[6]。たしかに，ベンジャミン・ライト（Benjamin Wright）らがいうように，西部は東部の制度を学んだのであって，新しい制度を作り出したわけではなく，新しい思想を生み出したわけでもなかった[7]。「（アパラチア）山脈が開拓者と海岸地帯とを距てた時から，アメリカニズムという新しい秩序が起った」[8] というようなターナーの表現には誇張がある[9]。しかし西部の発展がアメリカにおける「貴族」的支配の伝統を弱め，世襲的価値に決定的打撃を与える役割を果したことは否定できないであろう。東部のエリートがかれらの威信を少くとも一部分世襲的価値から引き出していたのに対して，西部のエリートは自己の努力による達成だけが自己の威信の基礎であった。それゆえ，西部のエリートは，東部のエリートよりも積極的に，世襲的価値のアンチテーゼ，自己の努力による達成の価値の体現者として登場することができたのである。

ジャクソン以前の大統領はいずれもヴァージニアかマサチュセッツのジェントリーであり，旧家出身の教養ある人物であった。ジャクソンはこれらの人々と異り，孤児として成長し，西部のテネシー州で成功し，有力者となった人物であった。ジャクソンを大統領候補に擁立した政治家たちは，かれが1814年末のニューオーリーンズの戦いにおける勝利の英雄として国

民的に人気があることに着目し，さらにかれの孤児育ちの経歴を選挙民に宣伝して，かれを庶民(コモン・マン)の英雄に仕立てた。1828年の大統領選挙は，ジャクソンとジョン・クインジー・アダムズ John Quincy Adams という，ある意味では，全く対照的な人物によって争われた。一方は孤児で，正式の教育を受けず，荒々しい生活を送りながら独力で立身した人物であり，他方は第2代大統領の息子で，ハーヴァード大学を出て欧州に遊学した学識深い人物であった。ジャクソン派は選挙民大衆に対して，アダムズをぜいたくな貴族主義者であると非難し，素朴でいっこくな勇士ジャクソンこそ民衆の真の代表者であると訴えた。ジャクソンが無学であるということについて，ジャクソン派は丸木小屋で育ったかれのような人間こそ人間の本来の知恵と美徳とを備えている真の貴人であり，むしろ高い教育を受け学識をつんだ者の方が，人間本来の知恵と美徳とを失い堕落していると主張した[10]。候補者を一般民衆と同一化するこのような選挙戦術は，選挙権が普通選挙権に近い程度にまで拡大され，民衆が政治への参与に意欲的になっていた時代には，極めて有効なものであった。一般民衆はジャクソンに投票することによって，そしてかれを当選させることによって，権力との一体感をもつことができたであろう。ジャクソン派はやがて民主党と称するようになるが，このことは，18世紀にはまだ非難の言葉であった民主主義(デモクラット)者という言葉がよい意味の言葉となったことを表している。

ジャクソンの党はそれ以前の政党に比べると，より組織的な大衆政党であったから，政党の組織を維持するために，任命職の公務員に，党人任用制(スポイルシステム)や官職交代制(ローテーション・イン・オフィス)を大巾に採用しなければならなかった。ジャクソンはその方針を説明して，「すべての官吏の職務責任というものは，はなはだ簡単明瞭なものであり，一定の知能あるものは，だれでも，それらの職務責任の遂行がすぐにできるようになるものである。わが国ではだれ一人として自分一個人にその能力があるからといって，官位につく権利を他のものより多くもってはいない」と述べ，それを正当化した[11]。このかれの主張には，民衆信仰ともいうべき，一般民衆のちえに対する信頼が強く表明され

ている。このような民衆信仰は当時の知識人の間にも浸透していた。ジャクソンの熱列な支持者となった有名な歴史家バンクロフト（George Bancroft）は，「多数者は少数者より賢く，大衆は哲学者より賢い」と主張した[12]。

こうしたジャクソン派の民衆信仰には，学識ある者よりも無学な庶民の知恵や美徳を讃えることによって，反知性主義に陥いる傾向があった。その傾向は，とくにフロンティアに近い西部では著しく表われていた。西部のある知事は政治家として人気を得るために，自分の学識をかくし無学をよそおったという[13]。また西部のある説教師は，「俺は ABC の一字も知らねえ。聖書を一章だって読むこともできねえ」が「精神でもって説教することができる」といい「高慢ちきなあいつら大学出の野郎ども」を罵しったという[14]。このような無学を正当化する態度が西部では多く見られたのである[15]。

候補者の庶民性を強調し，民衆に合一化することによって，民衆の支持を獲得するという戦術はジャクソン派によって用いられ，効果をあげたので，反対派のホイッグ党もまた同じ戦術を用いて対抗するようになった。ホイッグ党が西部の野人デイヴィ・クロケット（Davy Crockett）を党に引き入れて連邦議会に送り，かれの冒険談のパンフレットをばらまき，かれに各地で演説させたのは，いささか戯画的であるけれども，それはホイッグが貴族的政党だというジャクソン派の攻撃に対抗して，ホイッグ党にもジャクソン以上の野人がいることを示すためであった[16]。1840年の選挙では，ホイッグ党は完全に民主党の戦術を逆用した。かれらは大統領候補にインディアン戦争の英雄ウイリアム・ヘンリー・ハリソン（William Henry Harrison）を選び，果敢な宣伝によって，丸木小屋に住む素朴な農夫というかれのイメージを作りあげることに努めた。ヴアージニア・ジェントリー出身のハリソンは質素な農民となり，オハイオ州にあるかれの邸は丸木小屋に変ったのである[17]。ホイッグたちが用いた宣伝文書には，たとえば，次のような戯詩があった。

われらの農夫（ハリソンのこと）が嬉しそうに食事にいくのをみてごらん
ビスケット，チーズにりんご酒
粗末だけれど家庭的な食事だ
マーチン（民主党の大統領ヴァンビューレン）はやっとお昼頃
朝の食事をたべにくる
ぜいたくな磁器の食器から
黄金のさじですすってる[18]

ホイッグ党は『丸木小屋』という機関誌を発行し，丸木小屋とりんご酒を庶民性のシンボルとして宣伝に用いた。ホイッグ随一の政策通ヘンリイ・クレイも，選挙をめぐる争いは丸木小屋対邸宅，りんご酒対シャンパンの争いであると演説し，また保守主義者といわれた有力な政治家ダニエル・ウェブスターも，「私は丸木小屋では生まれなかった。しかし私の兄や姉は丸木小屋で生まれ，ニューハンプシアの雪だまりの中で育った。……その小屋は今でも残っていて，私は毎年そこにでかけていく」と演説し，自分を丸木小屋に結びつけることに腐心したのである[19]。

(2)　セルフメイド・マン崇拝の確立

ジャクソニアン・デモクラシーは政治を大衆化するとともに，またセルフメイド・マン（selfmade man）をアメリカの英雄として確立した。ジャクソン派がジャクソンを民衆の英雄であるというとき，それはかれが素朴な庶民的人物であるからだけではなく，かれが独力で成功した人物であったからでもあった。個人の努力による達成の価値を強調する価値観は，すでに18世紀にフランクリンによって表明されていたものである。しかしそれが国民的価値観として確立したのは，言いかえれば，セルフメイド・マン崇拝が国民的な信仰として確立したのは，ジャクソニアン・デモクラシーの時代であるといえよう。現実のジャクソンの経歴がどのようなものであれ，「われらの孤児育ちの英雄」としてのかれの生涯は神話化され，典型的なセルフメイド・マンとして讃えられたのである。「だれ一人の身寄り

もなく，自分の力以外に何一つ受け継いだものもなしに，人生行路にのりだした。」「困難にたえ努力の末，かれは農夫から大統領へと立身した。」こうしたジャクソンに対する讃辞は，数えきれない演説や文書の中でくり返された。ジャクソンのような人物が成功の機会を得て，大統領にまで到着できたという事実は，アメリカでは公平な競争の場で自分の生活を切り開いていくことができるというアメリカ人の信念を強めた。「貧しい孤児の少年が力強い支配者となるのをみるとき，われわれはわが国の政治形態により一層強い愛着を感じる。わが国の政治形態は社会の上層にいる者にも，下層にいる者にも等しくその祝福と尊敬とを与えるのである」とある筆者が論じ，「アメリカの制度は最も貧しい個人にさえ，富と名誉への道を開いているように機能している」と他の筆者は述べた[20]。アメリカには，貧乏な家に生まれた者に対しても，能力に応じて成功する平等な機会が与えられている，ということがアメリカ人の国民的な誇りとなったのである。ジャクソンの党は，合衆国銀行を少数者に独占的特権を与える機関であると非難し，その特許状更新を拒んだ。特許状更新法案を拒否したジャクソンは，その際発表した教書の中で，「才能の，教育の，あるいは財産の平等は人間の制度によって実現されうるものではない。天与のすぐれた能力を充分に発揮し，立派な勤勉と節約と徳との果実を充分に享受することについては，各人は法によって保護されるべき平等な権利を有する。しかし法律がこれらの自然で正当な利点にさらに人工的な差別を加え，称号や下付金や独占的特権を与え，富める者をますます富ませ，力ある者をますます有力にするときには，社会のより貧しい人々——農民，労働者，職人——は……かれらの政府の不公正に不満をのべる権利をもつのである」と述べた[21]。この文章はジャクソニアン・デモクラシーの平等主義が財産の平等ではなく，機会の平等を要求するものであることを最も明確にのべた文章であろう。「平等な権利はすべての者に，特権はだれにも与えるな」がジャクソン党のスローガンとなったのである[22]。こうしてセルフメイド・マン崇拝の確立とともに，万人に対して平等な競争の機会の開かれた社会

というアメリカの社会像が成立したのである。

ジェファンソは堅実な市民たる自営農民から成り立つ社会というアメリカ社会の理想像をもっていた。このジェファソン的理想像とジャクソン的理想像とを比べると，そこには若干の相違がみられる。前者の場合，自由土地保有者のみを堅実な市民とみなす伝統的観念が残っており，農民中心的である。後者の場合，もはやそのようなものは見られない。ジャクソンは「人民」という言葉を用いるとき，その中には農民とともに職人や労働者を含めていた。またジェファソン的理想像は静態的であり，ジャクソン的理想像は動態的である。成功とか競争という観念が前者には欠けている。これらの相違はジェファソンの時代からジャクソンの時代に至る間のアメリカ社会の変化を反映している。ジャクソンの時代には，1812年戦争後始ったいわゆる「交通革命」の開始によって，西部の発展は著しい速度で進んでおり，西部の農業地帯の拡大は東部の製造業を刺激し，全国的市場の発達によってアメリカ全体の商業活動が活潑化しつつあった[23]。アメリカ社会は，ジャクソンの時代にはジェファソンの時代に比べて，著しく躍動的になっていたのである。洞察力に富む観察者トックヴィル（Alexis de Tocqueville）が訪れたのは，このような1830年代のアメリカであった。かれはアメリカ社会の徹底した平等主義精神に驚き，躍動的性格に目を見張った。「自由は，」とかれはアメリカ人について観察した。「かれらの欲求の最も主要な対象ではない。平等こそがかれらの偶像である。……平等なしには何ごともかれらを満足させることはできない。かれらはそれを失うよりは死を選ぶであろう。」[24]かれは平等をアメリカの第一の特色とみたのである。またかれはアメリカ人の動態性について，「合衆国では人は老後をすごすために家を建てたかと思うと屋根もでき上らないうちにそれを売ってしまう。木を植えても実がならないうちに売ってしまう。畑を開こんしたかと思うと収穫をまたずに他人に渡してしまう。かれは職を転々と変える。ある処に住んだかと思うとすぐに他処にいくことを考える…」と書いている[25]。かれはアメリカ社会の流動性を指摘する一方，またその反

面にある安定性に注目していた。「人間はつねに動いているが人間の精神はほとんど変らない」とかれは指摘し，「アメリカ人は変化を望むが革命を望まない」と述べている[26]。かれはそこにアリカ人の一種の保守性を見出していたのである。

(3) ジャクソニアン・デモクラシーの意義

ジャクソニアン・デモクラシーの担い手についての論議は，アメリカ史学史における大きな論争点の一つである。ターナーは西部農民をその担い手とみなし，シュレジンガー・ジュニア（Arthur M. Schlesinger, Jr.）は東部の労働者の役割を重視し，ハモンド（Bray Hammond）は新興実業家にその主な担い手を見出した[27]。また最近では，ジャクソンの民主党とその反対党のホイッグ党との間には，政策や思想においてそれほど明確な相違があったわけではなく，その指導層も支持層も明確に階級的に区別できないという見解が台頭している[28]。そして中には，ジャクソニアン・デモクラシーという概念を使うことの妥当性そのものにさえ，疑問を提起する研究があらわれている[29]。ジャクソンの民主党の性格が従来考えられてきたよりも曖昧なものであることはたしかである。ジャクソンの民主党の曖昧性はジャクソン自身の曖昧性が象徴的に示している。かれはプランターであり，地主であり，土地投機業者であり，弁護士であった。かれはたしかにセルフメイド・マンであったが，伝説に反して農夫だったことは一度もなく，テネシー州では，つねに州の上層階級と結びついており，決して一般庶民の味方ではなかった。かれが庶民の英雄という姿勢をとるようになったのは大統領候補として全国的政治舞台に登場するようになってからであった[30]。しかし私はジャクソニアン・デモクラシーという概念はいぜんとして妥当なものであると思う。庶民のちえに対する信頼を表明して貴族による政治という観念に徹底的攻撃を加え，世襲的価値を否定して自力による成功の価値を確立し，アメリカは万人に平等な競争の機会を与える社会だというアメリカ社会像を形成したのは，ジャクソンの民主党であった。ジャクソンの民主党は思想的に，アメリカの自由主義と平等主義

との結合を完成させたのである。したがって，ジャクソンの党の登場とデモクラシーとを結びつけてジャクソニアン・デモクラシーとよぶことは妥当であろう。

(4)　南部の問題

ここで問題となるのは南部であろう。南部には明らかに自由・平等の原理に反する奴隷制度が存在した。ジャクソン自身，南部人であり，プランターであった。そしてジャクソンの党が南部で相当数の支持者を得たことも事実である。平等的精神は一般的にいって南部諸州にも，他の地域と大した変りなく，滲透した。たとえば南部のほとんどの州で普通選挙制かそれに近い制度が採用されていた[31]。また南部は西方に急速に発達していたので，流動性に富む社会であった。南部の新しい州のプランターはほとんどが一代で身を興した成功者であった[32]。南部人も自由・平等の原理によって洗礼されたのであるが，しかしかれらは奴隷制度を次第に懸命に擁護するようになった。独立革命の際には，南部の指導者の中には，かれらの革命の原理と奴隷制度とが相容れないことを痛感し，奴隷制度はやがて消滅することを願っていた者が少くなかった。しかしイギリスにおける棉花の需要の急増とコトン・ジンの発明とによって，南部内陸地での棉の栽培が利益をあげるようになると，南部人はいかなる形での奴隷廃止論にも耳を傾けず，それを厳しく排斥するようになった。かれらは北部の奴隷制即時廃止論者の非難に対して，奴隷制度は温情的なものであって，奴隷は自己の身分に満足していると主張したが，しかしかれら自身それを確信し自己の道徳的潔白を確信することができなかった。奴隷の暴動や反乱に対するかれらの過度の恐怖心はそれを物語っているものといえよう[33]。奴隷解放はブラジルのような身分社会的性格の強い社会の方が，アメリカの南部の場合より，容易であったであろう。身分社会では不自由身分だった奴隷が解放されたとしてもかれらは最下層身分に留まり，上昇してくることは稀である。しかしアメリカの場合，奴隷を解放すれば，自由平等な競争的社会の一員として認めなければならず，また奴隷が継承財産ではなくて自

己の資本の投資である場合が多く，それもまた解放を難しくしたのである。自由平等の競争的社会のほうが，奴隷解放への決断を鈍らせたのである。しかもそれゆえに一層，奴隷所有者は自己の価値観と奴隷所有との相克に悩まされねばならなかった。ここにアメリカ南部の悲劇があった。

ジョージ・フィツヒュー（George Fitzhugh）の奴隷制擁護論はそのような相克から逃避しようとした懸命の試みであったといえよう。南北戦争によって奴隷制度は廃止され，黒人は憲法によって一応平等の市民権を与えられた。自由・平等の原理に反する奴隷制度は南部では，南北戦争の時まで存在していたが，それにもかかわらず，自由・平等・競争・成功・機会という言葉によって表現されるアメリカ的価値観はすでにジャクソンの時代に確立したといってよいであろう。

ま と め

以上，本稿では，独立革命とジャクソニアン・デモクラシーという二つの時代を中心にして，「アメリカ的信条」が形成される過程を考察した。ここで結論として第1章および第2章の要旨をまとめておきたい。

植民地住民は18世紀までにはそれぞれの植民地議会を拠点として強力な自治権を獲得し，名誉革命以後のイギリス本国住民と同じく，イギリス憲法に保障された臣民の権利と自由とを享有していた。したがって，実質的には，植民地時代のアメリカは市民社会であったといえるであろう。

しかし，イギリス国王に対する忠誠心をもち，自己をイギリス帝国に合一化していた植民地時代のアメリカ人は，また，イギリス的な価値観を保持していた。かれらは自由なイギリス臣民として個人の自由と権利との尊重，立憲政治，議会政治の原則を熱烈に信奉するとともに，イギリスの伝統たる世襲的価値への敬意をもち国王を頂点とする身分社会の観念を受けいれていた。植民地の指導層も一般民衆も「ジェントルマン」と「コモン・ピープル」とを区別し，公共の事柄については前者の指導にまかせることを当然と考えていた。

独立革命の際，アメリカ人はイギリスからの分離独立とともに，君主政・貴族制・封建制と訣別し，個人の尊厳，人間の平等，人民主権という原理を宣言した。独立したアメリカ人はかれら自身のナショナリズムをもつ必要から，アメリカが自由で平等な市民の共和国であることを強調した。独立革命の指導者たちは大部分植民地時代の上層階級の出身であり，多分に貴族的価値観を抱いていたが，かれらは君主制と絶縁し，人間の平等，人民主権という原理を高く掲げた以上，原理的に民主主義ないしは平等主義への傾斜に抵抗する根拠を失った。一方革命は民衆を行動に動員することによって，かれらの政治意識を刺激し，民主主義的気分を育成した。またアパラチア山脈以西の西部は独立とともにアメリカ人に開放され，19世紀にはいると「交通革命」に助けられて，西部への移住は急速に進んだ。同時に国内市場が拡大し，資本主義が急速に発展しはじめた。新しい西部は平等主義を促進し，資本主義の発展は新しい成功の機会を創り出す。こうして独立革命はジャクソニアン・デモクラシーへの道を開いたのである。ジャクソニアン・デモクラシーは庶民の知恵に対する信頼を表明して「貴族」あるいは「紳士」による政治という観念に徹底的な攻撃を加え，世襲的価値を否定して自力による成功の価値を確立し，アメリカはすべての者に平等な競争の機会を与える社会だというアメリカ社会像を形成したのである。

簡単にいえば，植民地時代のアメリカにおける自由主義と貴族主義との結びつきは独立革命において打ち崩され，自由主義は平等主義へと接近した。そしてジャクソニアン・デモクラシーに至って，自由主義と平等主義とは強固に結びつくのである。

権利の平等の強調，個人の自力による達成の尊重というジャクソニアン・デモクラシーの思想は，アメリカのナショナリズムと結びついて，その後のアメリカ史の発展の中で，強烈なイデオロギーとして作用するのである。社会主義運動の相対的欠如というアメリカの特色も，何よりもこのアメリカ的信条の作用によって，説明されうるものであろう。

南北戦争以後の歴史において，アメリカニズムがどのように作用してきたかについては，稿を改めて，別の機会に考察することにしたい[1]。また本稿ではきわめて簡単にしか触れなかった南部におけるアメリカ的信条の問題についても，別の機会により詳しく検討する必要があると思っている。

註

はしがき

1) Gunner Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, New York (Harper), 1944, p. 3.

2) *Ibid.*, p. 4.

3) Will Herberg, *Protestant Catholic Jew: An Essay in American Religious Sociology*, New York (Anchor Books), 1960, pp. 72—81.

4) アメリカ的信条，アメリカ思想，アメリカ文化などを論じた著作としては，次のものを参照した。Robert N. Beck, *The Meaning of Americanism*, New York (Philosophical Library), 1956 ; Daniel J. Boorstin, *The Genius of American Politics*, Chicago (U. of Chicago Press), 1953 ; Merle Curti, *The Growth of American Thought*, New York (Harper), 1951 ; Geoffrey Gorer, *The American People*, New York (Norton), 1948 ; Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, New York (Harcourt), 1955 ; Will Herberg, *op cit.*; Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men Who Made It*, New York (Vintage Books), 1954 ; Hans Kohn, *American Nationalism*, New York (Macmillan), 1957 ; Harold Laski, *American Democracy*, London (Unwin), 1948 ; Max Lerner, *America as a Civilization*, New York (Simon), 1957 ; Seymour Martin Lipset, *The First New Nation: The United States in Historical and Comparative Perspective*, New York (Basic Books), 1963 ; Gunner Myrdal, *op. cit.*; Henry Bamford Parkes, *The American Experience*, New York (Vintage), 1959 ; Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, 2vols., New York (Vintage), 1954 ; Robin M. Williams, Jr., *American Society: A Sociological Interpretation*, New York (Knopf), 1951.

第 1 章

1) Quoted in Clinton Rossitor, *The First American Revolution: The American Colonies on the Eve of Independence, New York* (Harvest Books), p. 4.

2) Quoted in Boorstin, *op. cit.*, p. 72.

3) "Declaration and Resolves of the First Continental Congress," in William

MacDonald, ed., *Select Charters and Other Documents illustrative of American History: 1606—1775*, New York (Macmillan), 1899, p. 359. アメリカ学会訳編,『原典アメリカ史』全五巻および別巻, 東京 (岩波), 1950—1958, 第2巻, 123頁。

4) Parkes, *op. cit.*, pp. 50—57.

5) Hartz, *op. cit.*, p. 3. 有賀・松平共訳『アメリカ自由主義の伝統』, 東京 (有信堂), 1963, 3 頁。

6) J. Hector St. John de Crevecoeur, *Letters from an American Farmer*, New York (Dutton), 1957, p. 36.『原典アメリカ史』第2巻, 334頁。

7) Chilton Williamson, *American Suffrage: From Property to Democracy*, Princeton (Princeton U. P.), 1960, p. 34.

8) チェスター郡の13タウンシップの土地保有者の合計645名 (1765年の課税記録によって計算) の内訳は次の通りである。1—49エーカーの土地保者, 95名。50—99エーカー, 133名。100—199エーカー, 276名。200エーカー以上, 141名。*Pennsylvania Archives*, 3rd Series, Vol. XI, pp. 3—133.

9) Williamson, *op. cit.*, p. 27.

10) 『原典アメリカ史』, 第1巻. 307—320頁。

11) Williamson, *op. cit.*, p. 27.

12) R. R. Palmer, *The Age of Democratic Revolution: A Political History of Europe and America: 1760—1800*, Princeton (Princeton U. P.), 1959, pp. 48—51.; Rossitor, *op. cit.*, pp. 140—144.

13) Parkes, *op. cit.*, pp. 50—57.

14) Palmer, *op. cit.*, pp. 48—50.

15) John Adams, *Novanglus*, in Alpheus T. Mason, ed., *Free Government in the making*, New York (Oxford U. P.), 1956, p. 134.

16) Hartz, *op. cit.*, p. 50 ; Boorstin, *op. cit.*, pp. 80—94.

17) Roger Burlingame, *The American Conscience*, New York (Knopf), 1957, p. 155.

18) 『原典アメリカ史』, 第2巻, 156頁の図版参照。

19) 小松春雄訳『コモン・センス』, 東京 (岩波文庫), 1953年, 99—108頁 (訳者解説)。

20) パドーヴァー編, 富田虎男訳『ジェファソンの民主主義思想』, 東京 (有信堂), 1961年, 19, 20, 21, 160, 頁。

21) Gilbert Chinard, *Thomas Jefferson: The Apostle of Americanism*, Ann Arbor (U. of Michigan P.), p.172.

22) 斎藤真ほか訳編,『アメリカの建国思想』, 東京 (河出), 1963年, 122—123頁。

23) Williamson, *op. cit.*, pp.92—116.

24) Samuel E. Morison, ed., *Sources and Documents illustrating the American Revolution*, New York, p.247.

25) Palmer, *op. cit.*, pp.204—205.

26) Frederick B. Tolles, "The American Revolution Considered as a Social Movement: A Re-Evaluation," in Sidney Fine and G. S. Brown, eds., *The American Past*, 2vols., New York (Macmillan), 1961, pp.128—129.

27) William H. Nelson, *The American Tory*, New York (Oxford U. P.), pp.189—190.

28) Palmer, *op. cit.*, pp.202, 206.

29) 独立革命の史学史については, Wesley Frank Craven, "The Revolutionary Era," in John Higham, ed., *The Reconstruction of American History*, New York (Harper), 1962, pp.46—63；今津晃『アメリカ革命史序説』, 京都（法律文化社), 1960年, 463—501頁；富田虎男「アメリカの独立と市民革命—— 史学史的再検討——」,『歴史教育』, 第10巻10号（1962年)；清水博ほか「独立革命史の史学的再検討」,『史苑』（立教大学), 第23巻1号（1962年）などが詳しい。

30) いわゆる内部革命論を最も図式的な形で展開したのは Merrill Jensen, *The Articles of Confederation*, Madison (U. of・North Carolina P.), 1948 であるが, かれの説はその後の多くの研究によって批判され修正された。ジェンセンと似た問題意識に立つダグラス Elisha P. Douglass の実証的研究 *Rebels and Democrats*, Chapel Hill (U. of. North Carolina P.), 1955 も内部革命論には否定的である。ジェンセ自身のちにはかなり自己の見解を修正している。"Democracy and the American Revolution," *Huntington Library Quarterly*, Vol. XX (1957), pp. 321—341.

第 2 章

1) Max Farrand, ed., *The Record of the Federal Convention*, 4 vols., New Haven (Yale U.P .), 1937, Vol. pp.208, 397, 398.

2) Mason, *op. cit.*, 385.

3) Williamson, *op. cit.*, pp.138—207.

4) *Ibid.*, pp.208—222；

5) Frederick Jackson Turner, *The Frontier in American History*, New York (Holt), 1920.

6) フロンティア学説をめぐる史学史については Gene M. Gressley, "The Turner Thesis—A Problem in Historiography, "*Agricultural History*, Vol. XXXII (Oct., 1958), pp.227—249 に詳しい。

7）Benjamin Wright, Jr., "Political Institutions and the Frontier," in G. R. Taylor, ed., *The Turner Thesis*, Boston (Heath), 1949, pp.42—50.

8）Turner, *op. cit.*, p.4.

9）ターナーのフロンティア学説には，仮説の提示という面とともに信条の表明という面がある。アメリカの民主主義はヨーロッパからもたらされたものではなく，フロンティアで生まれたのだという主張は，それ自体，ナショナリストたるかれが，ヨーロッパに対してアメリカの独自性を強調するアメリカ・ナショナリズムの伝統的思想法を継承したものであり，またアメリカ民主主義に対する西部の貢献を強調するかれの見解は，東部に対して対抗意識をもつ西部人のセクショナリズムの反映でもあった。フロンティア学説は一面では信条の表明であるために，誇張した表現が多くみられるのである。

10）John W. Ward, *Andrew Jackson: Symbol for an Age*, New York (Oxford U. P.), pp.30—45.

11）*A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents*, New York (Bureau of National Literature), 1897, Vol. p.1012.

12）Quoted in Merle Curti, "Intellectuals and Other People," *American Historical Review*, Vol. LX (Jan., 1955), p.267.

13）*Ibid.*, p.267 n.

14）Merle Curti, *American Paradox: the Conflict of Thought and Action*, New Brunswick (Rutgers U. P.), 1956, pp.38—39.

15）Curti, "Intellectuals and Other People," *loc. cit.*, pp.266—268 に多くの例がひかれている。

16）Vernon L. Parrington, *Main Currents in American Thought*, 3 vols., New York (Harcourt), 1927, Vol. II, pp.172—179 ; Ward, *op. cit.*, pp.89—90.

17）Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Age of Jackson*, Boston (Little), 1946, pp.292—299.

18）Quoted in Arthur M. Schlesinger, Sr., *Paths to the Psesent*, New York (Macmillan), 1949, p.246 ; 中屋・米田共訳『アメリカの歩んできた道』，東京（巌松堂），1955年，379頁。

19）Schlesinger, Jr., *op. cit.*, pp.293, 294 ; Ward, *op. cit.*, pp.94—95.

20）Ward, *op. cit.*, pp.166—180.

21）*A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents*, Vol. III, p.1153.

22）Quoted in Hofstadter, *op. cit.*, p.191.

23）George Rogers Taylor, *The Transportation Revolution*, New York (Rinehart), 1951.

24) Tocqueville, *op. cit.*, Vol. I, pp.57—58.

25) *Ibid.*, II, pp.136—137.

26) *Ibid.*, II, pp.255, 257.

27) ジャクソニアン・デモクラシーの史学史については，Charles Grier Sellers, Jr., "Andrew Jackson versus the Historians," *Mississippi Valley Historical Review*, Vol. XLIV (March, 1858), pp.615—634 ; John W. Ward, "The Age of the Common Man," in John Higham, ed., *op. cit.*, pp.82—97 に詳しい。

28) たとえば Glyndon G. Van Deusen, "Some Aspects of Whig Thought and Theory in the Jacksonian Period," *American Historical Review*, Vol. LXIII (Jan, 1958) pp.305—322 ; Marcus Cunliffe, *The Nation Takes Shape : 1789—1837*, Chicago (U. cap. of Chicago P.), 1959. など。

29) Lee Benson, *The Concept of Jacksonian Democracy : New York as a Test Case*, Princeton (Princeton U. P.), 1961, pp.329—338.

30) Thomas P. Abernethy, "Andrew Jackson and the New Democracy," in James L. Bugg, Jr., ed., *Jacksonian Democracy : Myth or Reality*, New York (Holt), 1962, pp.51—61.

31) Fletcher M. Green, "Democracy in the Old South," *Journal of Southern History*, Vol. XII (Feb., 1946), pp.3—25.

32) Francis B. Simkins, *A History of the South*, New York (Knopf), 1953. p.134 ; W. J. Cash, *The Mind of the South*, Garden City (Doubleday Anchor), 1956, pp.25—30

33) Stanley M. Elkins, *Slavery : A Problem in American Intsitutional and Intellectual Life*, Chicago (U. of Chicag P.) 1959, pp.218—222.

ま と め

1) きわめて簡単にそして不充分にではあるが，拙稿「ウイルソンと革新主義運動」，『史苑』，第21巻1号（1960年9月）；「革新主義運動の性格」，岩間徹編『変革期の社会』東京（お茶の水書房），1962年，所収；「アメリカ人の歴史意識」，『史論』（東京女子大学），第11集（1963年11月）等はこの問題に触れている。

Emergence of the American Creed

"A Historical Study of Americanism"

By Tadashi Aruga

Introduction

I. The American Revolution

1. The English Tradition in Colonial America 2. Ar Ironical Meaning of Thomas Paine 3. America as the Antithesis to Europe 4. Significance of the Revolution in American History

II. Jacksonian Democracy

1. Extension of Suffrage and the Triumph of Populism 2. "Self-made Man" as the National Hero 3. Significance of Jacksonian Democracy in American History 4. The American Creed and the South

Cnoclusion

It is commonly accepted that a social ethos held in common by Americans, which was termed by Gunner Myrdal as the "American Creed", is a bond unifying the American nation. The Creed is composed of beliefs in essential dignity of the individual, fundamental equality of all men, and their inalienable rights to freedom, justice and a fair opportunity. The Creed also includes a belief that the United States was built to realize these ideals — a belief that their country is and should be a land of freedom and equality. These ideals are of course not exclusive to America. They are rather basic ideals of modern democracy. But they have never been so strongly emphesized and so firmly connected with nationalism in any other countries as in the United States. The purpose of this paper is to trace the historical development of the American Creed, focusing on the two crucial periods of early American history — the American Revolution and the Age of Jacksonian Democracy.

In the colonial period, Americans were Englishmen loyal to their

king and proud of their being Englishmen. While they cherished the rights and liberties of English subjects guaranteed in the English Constiution, they retained traditional English ideas such as respect to hereditary status and concept of hierarchical society. Colonial America was still aristocratic to a considerable degree, while the natural condition of the the new continent was fostering democratic spirit, Colonial leaders, who had enjoyed their liberty, prosperity and status, had stong attachment to British Empire and no inherent hostility to monarchical government. They could oppose some policies of the mother country within the frame work of the British Empire and the logic of the English consitution. But they were hesitant to be committed to independence. Ironically the first agitating voice of independence and of republicanism in America came from an "Englishman" who had arrived in America in 1774. Thomas Paine in his famous "Common Sense" presented America for the first time as the antithesis to England and Europe. This America vs. Europe contrast was ardently repeated by Americans afrer independence and became a traditional practice of American nationalists. It is correct to call Paine the foremost ideologue of the American Revolution. But it is in a very paradoxical sense. In the American Revolution, Americans clearly separated ideologically themselves from monarchism, aristocracy, and feudalism, and declared such principles as dignity of the individual, equality of men, and people's sovereignty. Americans, now independent, needed a powerful source of nationalism. It was found in the ideals proclaimed in the American Revolution. The Foundaing Fathers, who mostly came from upper-class families, still retained some of aristocratic sentiment. Once they proclaimed the essetial equality of men and the idea of popular soverignty, however, they lost a strong ideological basis to resist tendency toward democracy and equalitarianism. The common people, on the other hand, awakened politically, now began to demand demoracy and equality. Thus, the Revolution opened the way toward Jacksonian Democracy.

Andrew Jackson, the symbolic leader of Jacksonians, personified ideally the "common man" and the "selfmade man." Jacksonian Democracy destroyed the idea of rule by aristorcacy or gentry, and affirmed the political wisdom of the common men. It repudiated thoroughly the hereditary values, and installed the "self-made man" as the national hero. With the establishment of the self-made man worship, a national belief was crystallized that Amerca is a classless society which opens equal opportunity to all on a competitive basis. Emphasis on equality of men and deference of individual achievement were inseparavley combined with American nationalism in the age of Jacksonian Democracy. Thus, it may be said that the American Creed was established in the age of Jacksonian Democracy.